

## 平成 21 年度 博士後期課程 学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

日本版「小児版・作業に関する自己評価」の構成概念妥当性と信頼性の検討

学位の種類: 博士 (保健科学)

保健科学研究科 博士後期課程 保健科学専攻 地域保健科学分野

学修番号 05957601

氏名: 有川 真弓

(指導教員名: 山田 孝 教授)

注: 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1 枚 (A4 版) に収めること

小児版・作業に関する自己評価 (Child Occupational Self Assessment, 以下 COSA) は、クライアントである子どもたちが、日々行う活動の状況に関する理解を深め、自分の価値を示し、変化に対する優先順位を設定する自己報告による評価法である。COSA を用いることで、子どもが困難と感じている作業や価値を置いている作業を知ることができ、それに基づいて作業療法士とクライアントが協力的に目標を立て、作業療法を展開していくことができる。アメリカで作成された COSA を日本語訳した日本版 COSA は逆翻訳と面接を用いた先行研究により、言語的妥当性が確認されている。本研究の目的は、日本版 COSA の信頼性と構成概念妥当性を検討することである。

通常学級に通う児童 356 名に日本版 COSA を集団で実施した。2 週間後に全対象児童に再度日本版 COSA を行った。日本版 COSA の有能性尺度得点を用いて、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行い、構成概念妥当性を検討した。因子負荷量の基準は 0.35 とした。また、Cronbach の  $\alpha$  係数による内部一貫性と Spearman の順位相関係数を用いた再試験法により信頼性を検討した。統計解析には SPSS 15.0J for Windows を用いた。

構成概念妥当性検討の結果、日本版 COSA は「挑戦的作業」「動機づけられた作業」「日常生活課題」「期待された課題」の 4 因子、合計 22 項目から構成されることがわかった。作業有能性尺度の検査・再検査相関は  $r=0.78$ 、価値 (重要性) 尺度の検査・再検査相関は  $r=0.76$  で、ともに 1% 水準で有意な相関が認められた。内部一貫性検討の結果、有能性尺度の 4 つの因子構造で採択された 22 項目の Cronbach の  $\alpha$  係数は  $\alpha=0.86$ 、価値 (重要性) 尺度の 25 項目の Cronbach の  $\alpha$  係数は  $\alpha=0.92$  であった。

日本版 COSA の有能性尺度得点を用いた探索的因子分析から「挑戦的作業」「動機づけられた作業」「日常生活課題」「期待された課題」の 4 因子構造を持つことがわかり、このうち、第 2 因子は遊び・余暇活動、第 3 因子は日常生活活動に該当するものと考えられた。第 1 因子と第 4 因子は児童にとってがんばってやるべき義務的作業活動であり、仕事 (生産的活動) に該当するものと考えられる。これらのことから、日本版 COSA の因子構造は、作業の分類に関連するものと考えられた。Cronbach の  $\alpha$  係数は作業有能性尺度が  $\alpha=0.86$ 、価値 (重要性) 尺度が  $\alpha=0.92$  と高い内部一貫性が認められた。一方、検査・再検査相関は 0.8 に満たなかったが、これは日本版 COSA の質問項目が決まった作業形態を示していないことを踏まえると十分容認されるものと思われた。以上より、日本版 COSA は高い信頼性と構成概念妥当性を持つと考えられた。